

『東大がつくった確かな未来視点を持つための高齢社会の教科書』

第一回「高齢社会検定試験」公式テキスト

発行日 2013年3月30日
編著者 東京大学高齢社会総合研究機構
発行所 ベネッセコーポレーション
定価 1800円+税

「高齢社会と騒いでいるだけでなく、確かな未来視点を自ら持て」という提言に私は強く賛同します！

日野原重明（聖路加国際病院理事長）

世界中で日本が高齢社会のトップバッターにならざるを得ないなら、リスペクトされる知見と行動力を持て。

小宮山宏（三菱総合研究所理事長、前東京大学総長）



予定より少し遅れたが、それでも12月までの新資料を収めながら奥付では3月期末に間に合わせたところに、事務局・編集サイドの並みならぬ労苦が推察される多重で柔構造をもった教科書本である。（2色刷り。312ページ。本文33字×40行。図表多数）

まず「東大がつくった」というタイトルをつけたところに街談巷議での賛否は分かれるだろう。が、ひねればひねるほど毀誉褒貶が増す世相だから、ここらで悪玉ジャーナリズムを撃退しておくほうがいいという判断は、東大らしい“世相の読み”を感じさせる。はじめに言ってしまうが、第一回検定日の9月14日（土曜日）が、「老人の日」の前日、「敬老の日」（第三月曜日）の前々日に設定されているところにも、同じ用意周到な“世相の読み”を感じさせるカッコよさがあるのである。

他がやらないうちに「東大がつくった」と読めば、課題そのものはこの国に潜在しているのに巷間の対応がいかにもにぶく対応が遅延しているという学界からの有訴すらうかがえようというものである。ジェロントロジーとジェロンテクノロジーをいっしょに説くほどに、この国の「高齢社会」（「高齢者社会」ではない）にかんする対応は手つかずのまま遅延しているのである。東京大学高齢社会総合研究機構からしてが2009年4月の設立である。

上に「巷間」といったが、それは学界をのぞいた政界、経済界、官僚そしてジャーナリズムと世論にまで及ぶもので、雑に言えば学界の独り勝ちなのである。この本をつくった東大関係者の方々はそう自負しているにちがいないのである。

上に「高齢者社会」といったが、わが国政府の「社会保障」事業は年々1兆円を積み上げながら、医療、介護、福祉、年金に及ぶまで高齢者個人を支える「高齢者社会」に対して実施されてきたのであった。

ひとつの指標だが、「高齢化社会」（高齢化率7%から14%まで）のあいだはそれではなかったといえるだろう。高齢者（65歳以上）が増えて7%を超えるところからその倍加年数である14%を超えるところまでを「高齢化社会」と呼んでいる。そこからが「高齢社会」である。ご存じのようにいまや日本は3000万人に達し、世界一の「超高齢社会」（24・1%）になっている。それなのに高齢者ひとりひとりに成員としての実感も自覚もない。巷間にそれを危ぶむ世論もない。

ひとつの指標といえばそれまでだし、「高齢化社会」であった期間がわずか24年（1970年～1994年）では、あまりにも短くてなすすべもなかったといえばそれまでである。フランスは126年（115年という資料も）、スウェーデンは85年、イギリスが47年、ドイツが40年という。高齢化の進み方がゆっくりなら高齢社会対策もそれなりのペースですすめられたのだが。といったところで、わが国が手つかずできたことの言いわけにはならない。国民の活力はその間、確実に「デフレーション（萎縮）」に向かい、ほかならぬ高齢者層にしわよせが及んできたからである。

ここに一冊の「高齢社会」にかんする総合的教科書が登場した。

「高齢者」と「高齢社会」にかかわるすべての領域を網羅しようと努め、20章に振り分けている。専門領域をもつ執筆者におもいきり手足を伸ばしてもらって担当分野を広くまかせている。その上に大胆にも2030年の「超高齢未来」像を見透かしながら方向性を示している。理想主義者でなければ果たせない領域である。

.....

9月の第一回検定は「総論」「個人」「社会」の3部でおこなうことから、当然に本のつくりもそうになっている。

2030年の「超高齢未来」像を見透かしながらの「総論」3章の視点は、まずは1章で現状を把握し、2章で課題を整理し、3章で解決にむけた方向性を示す。

「個人編」の9章は、生き方（三つのステージ）、活躍の仕方（就労・参加・学習）、住まい、移動、暮らしとお金、支える資源、そして老化の理解、認知・行動障害、最後の日々。

「社会編」の8章は、社会保障、医療、介護・福祉、年金、そして住宅（まちづくり）、移動システム、技術、法に整理されている。

執筆者は16人。（それぞれ詳細な経歴は紹介されているが、生年が伏せられているので知りたいが年齢はおよそしかわからない。東大アカデメイアの丘に学んだ人たちで、「森」の上の木はしっかり見定めているが、言い過ぎをあえてすれば、下の林についてはいささか心もとないのである。）

「東大がつくった」のだからいたしかたないといわれるのが、「欧米型高齢社会」日本版への指向である。海外の先行学者からの影響を脱していない。国際的に先行しているのだ

から、日本伝来のあるいは特性をもつ「日本型高齢社会」への指向と成果が期待されるのだが、その視座が希薄なのである。

まずはこの国の風土がもつ「地域特性としての四季」が組み込まれていない。洋装・洋風の暮らし指向である。この国での人生は和装・和食・和風の住まい方など季節折々の衣・食・住によって成り立っており、とくに高齢期の人生を地域・在宅をめざした充足に期待するなら、この半世紀とともに得た人生の長寿期に、この半世紀とともに失った地域のよきものの再生を組み込むべきだろう。旬の食、季節の衣・四季折々の地域のくらしぶりは、いま高齢期を過ごす人びとの人生に喜びを与える不可欠の要件だからである。

「日本型」というか「東洋型」というか、欧米とは異なる死生観、生命認識、人生への理解もまた導入すべきであろう。哲学者の練り上げた論理体系など必要としない。身近な暮らしの中で実感することだからである。人の生命の存在過程を、

「からだ・こころ（こころざし）・ふるまい」（体・志・行）

の3元（カテゴリー）として認識するものである。観察を究めればこの3つ以外にないといっている。「体・心・技」とも、「健康・知識・技能」とも、「医療・認知症・介護」とも視点によって異なるが、お元気な蟹江ギンさんの娘さんたちなら「たべる・しゃべる・自分でする」ともなる。本文に散見する「知識と経験」「心理と生理」「心と体」といった2分類分析の不完全さがみえてくる。たとえばp 156の図2の「家庭・社会的問題」を「行動的問題」とし、「行動の老化の特徴」をいれて、体（医療）、心（認知症）、行動（介護）の3セットにさせていただくと明解になるのですが。

「東大がつくった」から、東大以外の学者が検討し内閣府の官僚がまとめた「高齢社会対策大綱」など目じゃないのかといわれかねないのが、「高齢社会対策大綱」の解説である。東京大学ジェロントロジー・コンソーシアムが策定した「2030年超高齢未来に向けた産業界のロードマップ」と2点が課題解決への活動をうながす文献として紹介されているのだが、前者の解説が手抜きといわれかねない扱いなのである。「高齢社会対策大綱」そのもの、上記の学者ほかによる検討会報告書「尊厳ある自立と支え合いを目指して」（清家篤座長）、そして直近の『高齢社会白書』をながめまわした上での整理と推測されるが、「基本的考え方」の部分を解説しますといいいながら「大綱」そのものの論旨の説明になっていないごちゃまぜの印象を与えること。図2：「高齢社会対策大綱」における基本的考え方の概要の内容が、上記「検討会報告書」の目次そのままであり、欠落さえある。改訂は3度目ではなく2度目である。全体の構造と課題解決に向けた方向性に関わる文献であり、もう少しデリケートな対処があつてよかつたであろう。

ブックデザインについては、担当する若いデザイナーとの調整で決められたのだろうが、本文33字×40行で欄外に注という体裁は、思いのほか余白が多くなったこと。2色刷りとしては多様な表現を駆使しているが、高齢者への配慮よりもデザインを優先した表や図が見られる。制作上の難題があるのであろうが、左右版面いっぱいに使って扱うべき図表への配慮の欠如となった。（認知症チェックリストや介護サービスメニューなどは左右通

している。認知機能のアンチエイジングの図は本文に割ってはいっている。)

「高齢期」に要するお金についての記述は、「森」の上の木をみて下の林をみない執筆者の視点が許容されている。きびしい実態への追求を欠いた不備は指摘されるだろう。

本誌の立場からすれば「高齢者・高齢社会と情報」という1章がほしいところである。

用語の統一や文体については編集者側の仔細な希望や指摘をうけた執筆者の検討がなされたのであろう、読み通しての違和感はない。

「索引」については、6ページ300項目はやや少ない。あまり適切とはいいかねる比喻としての「多毛作人生」などは採用しておらず見識を感じるが、孤独死、尊厳死、延命治療あたりはあっていい項目である。

次回から「検定対策」かたがた、仔細に読みこんでいこうと思う。ごいっしょに考えてください。(2013・4・15 堀内正範)